八識思想の成立について

――楞伽経の成立年時をめぐって――

舟橋尚哉

一

私は一昨年、「阿頼耶識思想の成立とその展開―末那識の成立をめぐって―」（大谷学報第四十九巻第二号）という小論文を発表した。その折、紙数の関係で楞伽経についての検討はまたの機会にゆずるということにしておいたので、ここに楞伽経の成立年時を検討しながら、「八識思想の成立」の問題を再検討してみようと思う。

楞伽経の成立年時に関しては、鈴木大拙博士は「楞伽経なるものは何時作られたかと言うに、それは固より判然わからぬ。……即ち第四世紀の頃には既に出来て居たものであろう」（鈴木大拙全集第五巻「楞伽経」四六九頁参照）といっておられる。

しかるに宇井博士は「佛教経典史」（昭和三二年刊）の中で

「楞[1]伽経は一般に大乗起信論の基づく経といわれ、従って古い経であるが如くに考えられて居るが、……世親以前に存したとは考えられないから、恐らく四〇〇年頃のものであろう」

といわれ、また印[2]度哲学史の中では

「此経（楞伽経）は世親の時代には恐らく未だ現われずして其没後間もなく現われたのであろう」

といって、楞伽経の成立を世親以後としておられる。これに対して西尾京雄氏は「楞伽経の成立年代に就て」（宗教研究 新第九巻 第五号 一二三頁参照）において、楞伽経が提婆時代（一七〇―二七〇年頃）にすでに存在していたことを、以前主張しておられた。

最近では中村元博士の「インド思想史」（一九五六年）

にも紹介されており、この書はかなり詳細に年時が入っており、便利な書であるが、楞伽経に関しては、

「如来蔵思想と唯識説との綜合として『楞伽経』(Laṅkāvatāra-sūtra)が成立した」[3]

とあるのみで、世親以前に成立したのか、以後に成立したのかについては言及されていない。ただ如来蔵思想の項で「楞伽経」を第三期の典籍とし、第二期の典籍に世親の「佛性論」や「摂大乗論釈論」をあげていることは、楞伽経の思想を世親以後と解しての分類のようにも思われる。[4]

また山田龍城博士の「梵語佛典の諸文献」(大乗佛教成立論序説、資料篇)では、楞伽経については数ヶ所(一〇三頁、一〇四頁等)出ているが、これまた楞伽経の成立年時については明確でない。

次に水野弘元博士還暦記念「新・仏典解題事典」(中村元、平川彰、玉城康四郎編)には、楞伽経の項で「原本の成立はおそらく四〇〇年前後と見られる」とあり、参考文献として常盤大定博士「支那仏教の研究第二」と E. J. Thomas の The History of Buddhist Thought とがあげられている。[5]

世親の年代を従来通り三二〇年―四〇〇年頃とすれば、西尾氏の説は例外として(楞伽経の成立年代を提婆時代まで溯らせることは私には疑問であるが)、一般に楞伽経の成立(四〇〇年頃)は世親と同時代か、やや後と考えられているようである。[6]

さて四巻楞伽(求那跋陀羅訳)の訳出が四四三年であることは一応認めなくてはならないから、当時、インドから中国へ伝来した事情を考え合わせれば、常識的には楞伽経が少なくとも三五〇年―四〇〇年頃には成立していたと考えなくてはならないであろう。(ここでいう楞伽経の成立とは、勿論、羅婆那王勧請品(=請佛品)や、最後の偈頌品などが附加される以前の原型の成立をいう)。

そうすると、世親の年時を従来通り三二〇年―四〇〇年頃でよいかどうかという問題と微妙に関連してくるのであるが、最近、フラウワルナー博士や梶山博士によって、安慧の年代が五一〇年―五七〇年(従来、四七〇年―五五〇年頃)に訂正されつつある今日、干潟博士などによって世親の年代も四〇〇年―四八〇年頃(従来、三二〇年―四〇〇年頃)に訂正される傾向にある。最近の著書の中には、これらの説を受けて、すでに無著、世親、陳那、安慧などの年時をかなり修正しているものもある。[7][8][9][10][11][12]

私がこのように楞伽経の成立年代を問題にし、世親以前に成立したものか、以後に成立したものかを問題にするのは、実は八識思想の成立と関連してくるからである。すなわち、楞伽経にはサンスクリットテキストの上にも明瞭に八識（aṣṭa-vijñāna）が説かれている。しかるに世親の著書には、唯識三十頌にも唯識二十論にも、サンスクリットテキストの上で八識という語は見あたらない。（もっとも、弥勒の瑜伽論には漢訳[13]、チベット訳[14]による限り、八識は説かれているが、それに相当する個所のサンスクリット断片[15]はまだ発見されていない）。もし楞伽経が世親以前に成立したものであれば、八識思想の成立はサンスクリット原本による限り、楞伽経の記述が最初ということになる。

二

さて楞伽経の刹那品では次の如く明瞭に八識が説かれている。[16]

eteṣveva trayaḥ svabhāvā aṣṭau ca vijñānāni dve ca nairātmye (Sk. p. 229. 1.1)

「この中に三自性、八識、二無我あり」

更にこの文の直後には次のような偈文（刹那品第五偈）があり、そこでも八識（aṣṭa-vijñāna）が説かれている。[17]

pañcadharmaḥ svabhāvaś ca vijñānāny aṣṭa eva ca | dve nairātmye bhavet kṛtsno mahāyāna-parigrahaḥ ‖5‖

「五法、〔三〕性、八識、二無我はすべて大乗の摂取なるべし」

このことはこれに相当する四巻楞伽（楞伽阿跋多羅宝経、四四三年訳出）の上でも八識が説かれており、

「是名〝五法〟。三種自性八識二種無我」（大正一六、五一一中）

「五法三自性　及与八種識
　二種無有我　悉摂〝摩訶衍〟」（大正一六、五一一中）

となっている。そしてその八識の内容については、やはり刹那品に[18]

katamānyaṣṭau yaduta tathāgatagarbha ālayavijñāna-saṁśabdito mano manovijñānaṁ ca pañca ca vijñānakāyās tīrthyānuvarnitaḥ (Sk. p. 235. 1.7)

「何等をか八となす。謂く阿頼耶識と名づけられる如来蔵と、意と、意識と、外道によって語られた[19]る五識身とである」

とあり、これに相当する四巻楞伽でも

「何等為レ八。謂如来蔵 名=識蔵-。心意意識及五識身。非=外道所説-」（大正一六、五一二中）

となっている。この他にも楞伽経[20]では八識を説いているところがあり、楞伽経に八識が説かれていることは疑う余地がない。それは古来より楞伽経は「五法、三性、八識、二無我」を説くといわれているから、むしろ当然かもしれない。

ではサンスクリット原本による限り、世親の著書の上にも説かれていない八識という語が、楞伽経の上にはサンスクリット原本の上にも何故に説かれているのであろうか。楞伽経ははたして宇井博士[21]のいわれるように世親以後に成立したものであろうか。それとも楞伽経は世親以前に成立していたが、世親はそのような八識を語ろうとしなかったのであろうか。

三

私はこれについて世親は楞伽経を知っていた。すなわち楞伽経の成立は世親以前であるという有力な資料を示してこの問題を検討してみようと思う。それは山口博士[22]も指摘しておられるように、世親造といわれる釈軌論 Vyākhyā-yukti に楞伽経の偈頌品の偈文が九偈も引用されているからである。釈軌論には、

(1) 諸蘊[23]中に我はない。諸蘊は我でない。それらは〔愚夫が〕分別する如くにはない。それらは〔不可言性として〕無ではない。

(2) 愚夫が分別せる如くに、一切のものが有であり、それが見られている如くであるならば、一切が如実に見られていることになるであろう。

(3) 〔また、そういう立場で〕一切が無なるよりしては、雑染と清浄とは無となろう。けれども見られている如くにそれらはあるのではない。またそれらは無でもない。

とあるが、これはまさしく楞伽経偈頌品の一三五偈[24]、一三六偈、一三七偈に相当している。さらに続いて釈軌論には楞伽経偈頌品一五〇偈[25]より一五五偈までの六偈が引用されている。

ただここで注意しなくてはならないことは、釈軌論には種々の経典名があげられているが、楞伽経という名は見あたらない。いま楞伽経偈頌品が引用されているところも、「解深密経中に『一切法は無自性云々と説いているが、かくの如き等のこれら一切は了義ではない』と出ている」[27]とあり、その後で「そこでそれらの経節の中で、

偈のみを掲げよう」といって、解深密経[28]の『諸法無自性、諸法無生、諸法不滅、諸法本来寂静云々』の偈を引き、その直後に「余〔経〕にも」といって先程の楞伽経の三偈及び六偈が引用されている。ここに余経というのみで、従って釈軌論中に楞伽経という経名は見あたらないが、両者を比較すれば楞伽経偈頌品と完全に一致していることが知られよう。

ただ偈頌品は四四三年訳出の四巻楞伽にはないので、初期の楞伽経には偈頌品はなくて、後世の附加ではないか。あるいは偈頌品の中には後世附加された部分もあるのではないか、という疑問もあり、従って釈軌論に楞伽経の偈頌品の偈の引用があるからといって、世親が楞伽経を知っていたことにはならないという反論もあることと思う。[29]

しかし、私は最近、この偈頌品の一三五偈、一三六偈、一三七偈が楞伽経無常品の偈(三五偈、三六偈、三七偈)[30]であり、四巻楞伽にもこの偈があることを見出した。四巻楞伽(求那跋陀羅訳)では、

「陰 中 無レ有レ我　陰 非二即 是 我一
不レ如二彼 妄 想一　亦 復 非レ無レ我
一 切 悉 有 性　如二凡 愚 妄 想一
若 如二彼 所 見一　一 切 応 見レ諦
一 切 法 無 性　浄 穢 悉 無レ有
不二実 如二彼 見一　亦 非レ無二所 有一」

(大正一六、五〇〇下)

となっている。そしてこれに相当する七巻楞伽(大乗入楞伽経、実叉難陀訳)では

「蘊 中 無レ有レ我　非二蘊 即 是 我一
不レ如二彼 分 別一　亦 復 非レ無レ有
如二愚 所二分 別一　一 切 皆 有 性
若 如二彼 所 見一　皆 応レ見二真 実一
一 切 染 浄 法　悉 皆 無二体 性一
不レ如二彼 所 見一　亦 非レ無二所 有一」

(大正一六、六一〇上―中)

となっており、両者は訳語の上に差異があっても、意味内容は全く同じである。

四

かくしてもし釈軌論[31]が世親の著書であるという定説が成り立つならば、世親は楞伽経の偈頌の一部を知っていたことになる。ただここで釈軌論が解深密経などの名を明瞭に出しながら、楞伽経については「余〔経〕に云く」

といって楞伽経の名を出していないことは、楞伽経が成立しつつある時期であって、世親は楞伽経の偈文は知っていても、楞伽経なる経名を知らなかったのかもしれぬ。あるいはこれらの偈文が他の経典にあって（その経典が現在伝わっておらず）、楞伽経と釈軌論とがたまたま同じ偈文を引用したということもありうるが、しかし釈軌論が解深密経と並列して楞伽経の偈文を引用している状態、及びその偈文が楞伽経偈頌品のみならず、無常品にも出ており、しかも四四三年訳出の四巻楞伽にもこの偈文があることを考え合わせれば、やはり世親は楞伽経を知っていたのではないかと思われる。

また安井博士[32]も指摘しておられるように、楞伽経無常品（Sk. P. 169）に出ている

「知[33]が所縁の境を把握しないとき、そのとき、唯識に住することがある。〔すなわち〕、識の所取が無なるによって、能取には、また、〔所取を所縁の境として〕能取するはたらきがない。……云々。ということが世尊によって説かれているが……。」

という文は、世親の「唯識三十頌」の第二十八偈、即ち

「識[34]が所縁を把握しないとき、唯識に安住する。所取が無いとき、それを能取しないから」

という偈文と殆んど一致している。それ故、安井博士は「入[35]楞伽経が唯識説を伝統しつつ、しかも世親に年代的に近いことを物語るもののように思われる」といっておられるが、この「唯識三十頌」の第二十八偈と楞伽経無常品の文の類似は世親と楞伽経との関連を知る上にまことに興味深いものである。

かくして私は世親は楞伽経なる経典を知っていたのではないか。すなわち楞伽経は世親と同時代か、それ以前に成立していたのではないかと思う。この結論は従来の宇井博士[36]や常盤博士[37]の定説とは異なり、色々と反論も出ることと思う。例えば常盤博士が「続支那佛教の研究」に述べておられるように、

「五法、八識、三性の如き中枢教義のみならず、二種闡提、五種性、三種意生身、三身佛の如き特殊の思想より見て之を「摂論」の後に属し、世親以前に上るを得ず」（一二五頁―一二六頁）

とか、

「楞伽経」の骨格は「瑜伽」「顕揚」「佛性」の諸論に散説せらるる五法、三自性、八識、二無我であり、又その中に是等諸論と共通する五種乗性や二種闡提や三身説を説いてある。……これより推して

「楞伽」の年代も大体世親と護法との間に置いて大過はあるまい」（七七頁）

といわれている教義的な問題をどう理解すればよいかという疑問も残るが、これらの問題は今後の課題としておきたい。

五

このように考えてくると、楞伽経の成立年代は四巻楞伽が四四三年に訳出されているので、やはり三五〇年―四〇〇年頃にすでに成立していたと考えなくてはならない。そこで問題となるのは世親の年代である。従来のように世親の年代が三二〇年―四〇〇年頃であれば、楞伽経は世親と同時代に成立したことになるが、最近の説のように世親の年代が四〇〇年―四八〇年頃ということになれば、世親が楞伽経を知っていても何等不思議はない。否、世親[38]の年代はグプタ王との関係からいえば、四〇〇年―四八〇年頃の方が妥当であるのに、『楞伽経』との関連で今なお三二〇年―四〇〇年説が一般に用いられているのである。従ってもし世親が楞伽経を知っていたということになれば、世親の年代は干潟説（四〇〇年―四八〇年頃）が有力になるのではないかと思う。

さてそこで、世親は八識思想を説く楞伽経を知っていながら、何故、自らの著書（サンスクリットの上で）に八識を説かなかったのかという疑問も残るが、おそらく世親は八識を説く必要性を感じなかったのであろう。八識を並列的にあげ、問題にするのは主として中国に入ってからである。初期唯識思想においてはそれほど問題にされていない。従って世親も唯識[39]三十頌第五偈において「意と名づくる識」（mano nāma vijñānam）を説いており、玄奘はこれを「末那」（大正三一、六〇中）と訳しているから、阿頼耶識と六識とを加えて一応八識になるが、世親はあえてこれを八識という形式では説いていないのである。

また初期唯識思想においては、八識があまり問題にされないのに、漢訳ではあえて八識で解釈されている例として、大乗荘厳経論、菩提品第六十七偈を上げることができる。サンスクリット本文では、[40]

「大円鏡智は不動である。
平等性と妙観察とに於けると、
及び成所作に於けるとの三の智慧が
それに依止している」（宇井博士訳）[41]

とあって、チベット訳も大体これに一致している。しか

るに漢訳（宇井本、第六十一偈に相当）には

「四智、鏡不動、三智之所依。
八七六五識、次第転得故」（大正三一、六〇六下）

となっていて、サンスクリット本文及びチベット訳にはない「八七六五識」という言葉が入っている。もっとも漢訳者が用いたテキストと、現存の梵本とが異なっていたのではないかという疑問も残るが、これなど、初期唯識思想ではあまり問題とされていない八識思想が漢訳されるとき挿入された好例であると思う。

以上、私は世親造といわれる釈軌論に引用されている楞伽経の偈文が、楞伽経の偈頌品のみならず無常品にも見出され、従って楞伽経の最も初期の形態を伝えているといわれる四四三年に求那跋陀羅によって訳出された四巻楞伽にも見出されることを手懸りとして、世親は楞伽経を知っていたのではないか。すなわち楞伽経の成立は世親と同時代か、それ以前であるという結論に達したわけであって、これは従来の定説、楞伽経は世親以後の成立であるという定説とは異なるが、今後の研究がこの問題を解決してくれることと思う。何分にも若輩ゆえ、論証の過程において不十分な点も多々あることと思う。皆様方の御叱正御鞭撻をお願いする次第である。

（「八識思想の成立」に関しては結城博士の「心意識論より見たる唯識思想史」（三一四頁以下）が非常に詳しい。私はサンスクリット文献を中心に「八識思想の成立」を考察する内、唯識三十頌第五偈に「意と名づくる識」mano nāma vijñānaṁ とある記述に注目し、かってサンスクリット文献の上では唯識三十頌の記述をもって一応「末那識の成立」といえるのではないかと論じたことがある。〈拙稿「末那識の源流」印度学佛教学研究第十六巻第一号所収、「阿頼耶識思想の成立とその展開」大谷学報第四十九巻第二号所収〉

しかしその折、楞伽経が世親以前に成立したものか、あるいは以後に成立したものかについての確証がなかったため、「八識思想の成立」の起源を楞伽経まで溯らせることができるかどうか疑問であった。しかし楞伽経の成立が世親以前となった今や、サンスクリット文献の上では楞伽経に「八識思想の成立」の起源を求めなくてはならないと思う）。

註

(1) 宇井博士「佛教経典史」一四九頁参照
(2) 宇井博士「印度哲学史」（大）四一九頁参照
(3) 中村元博士「インド思想史」二〇〇頁参照
(4) 中村元博士「インド思想史」一六八頁参照
(5) 水野弘元博士還暦記念「新・佛典解題事典」九九頁参照

(6) 常盤大定博士「続支那佛教の研究」には「予は敢て『楞伽』を以て世親以後護法以前という」（一二五頁）とある。

(7) 中村元博士「インド思想史」一六〇頁参照
宇井博士「印度哲学研究」（第一）四一四頁参照
宇井博士「印度哲学史」岩波書店(大)三八七頁、日本評論社(小)三一七頁参照
但し宇井博士「印度大乗佛教中心思想史」（三六〇頁）には、「世親は四百年前後乃至遅くとも四百二、三十年頃に死なれたものと考えるのが尤も穏当であろう。……これのみが唯一の正しいものであると信ずるのではない」とある。
龍山章真氏「印度佛教史」一八四頁参照

(8) E. Frauwaller; Landmarks in the history of Indian logic (Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd-und Ostasiens V, 1961) p. 137. 1.3

(9) 梶山博士「清弁・安慧・護法」（密教文化第64・65合併号）一五九頁参照

(10) 中村元博士「インド思想史」二〇〇頁参照
宇井博士「印哲研究第五」一三六頁参照

(11) 干潟龍祥博士「世親年代再考」三二一頁参照（宮本正尊教授還暦記念論文集 印度学佛教学論集）一九五四年　E. Frauwallner 博士はこの点に関し、二人の世親（古世親320—380, 新世親400—480）説を主張しておられる。(Die philosophie des Buddhismus 1956. p. 76 及び Landmarks in the history of Indian logic, WZKSO. V, 1961. p. 129-p. 131)

(12) 桜部・上山両博士「存在の分析」〈アビダルマ〉（仏教の思想2）昭和四十四年刊、二七四頁、二七五頁（インド佛教史年表）参照
服部・上山博士「認識と超越」〈唯識〉（佛教の思想4）昭和四十五年刊、二二頁、二三頁、五一頁参照

(13) 結城令聞博士「心意識論より見たる唯識思想史」三二〇頁参照

(14) 拙稿「阿頼耶識思想の成立とその展開——末那識の成立をめぐって——」（大谷学報第四十九巻第二号）四三、四四頁参照

(15) 瑜伽論の梵本は菩薩地の他に、最近声聞地、縁覚地が発見され、インドより出版されつつある。
V. Bhattacharya: The Yogācārabhūmi Part 1, Calcutta 1957. N. Dutt: Bodhisattvabhūmi, Patna 1966.

(16) 南条文雄博士校訂「梵文入楞伽経」二二九頁参照

(17) 南条文雄博士校訂「梵文入楞伽経」二二九頁参照

(18) 南条文雄博士校訂「梵文入楞伽経」二三五頁参照

(19) サンスクリット及びチベット訳 mu stegs can gyis brjod pa (163b) からは、「外道によって語られたる」となるが、しかし四巻楞伽では「非外道所説」となっている。

(20) 集一切法品、梵文入楞伽経一二六頁(四巻楞伽大正一六、四九六上)や、無常品、梵文入楞伽経一三八頁などにも説かれている。

(21) 宇井博士「佛教経典史」一四九頁（本文四〇頁）参照

(22) 山口博士「大乗非佛説論に対する世親の論破——釈軌論第四章に対する一解題——」（東方学会創立十五周年記念

東方学論集）三八二頁―三八三頁参照

(23) 同書三八二頁参照

〔gshan las kyaṅ〕 phuṅ po dag la bdag med de ‖
(rnams la)

phuṅ po dag ni bdag ma yin ‖
(bdag kyaṅ phuṅ po rnams la med)

de dag brtags pa bshin du med ‖

de dag med pahaṅ ma yin no ‖
(楞伽経の偈頌品の Sk にはあるが，Tib には欠)

ji ltar byis pas brtags pa bshin ‖

dṅos po thams cad yod pa ste ‖

ji ltar mthoṅ bshin de yin na ‖
(de dag) (yod na ni)

thams cad yoṅ dag mthoṅ bar ḥgyur ‖

dṅos po thams cad med paḥi phyir ‖

kun nas ñon moṅs dag pa med ‖

ji ltar mthoṅ bshin de med do ‖
(de)

de dag med pa yaṅ ma yin no ‖
(paḥan)

（影印北京版113巻281―4―6）

（ ）内は楞伽経偈頌品の Tib（北京版）による。

(24) na hy ātmā vidyate skandhe skandhāś caiva hi nātmani |

na te yathā vikalpyante na ca te vai na santi ca ‖ 135 ‖

astitvaṁ sarvabhāvānāṁ yathā bālair vikalpyate |

yadi te bhavedyathādṛṣṭāḥ sarve syustattvadarśinaḥ ‖ 136 ‖

abhāvātsarvadharmāṇāṁ saṁkleśo nāsti śuddhi ca |

na ca te tathā yathādṛṣṭā na ca te vai na santi ca ‖ 137 ‖

(25) 影印北京版113巻281―4―8

山口博士「大乗非佛説論に対する世親の論破――釈軌論第四章に対する一解題――」三八二頁―三八三頁参照

(26) 南条文雄博士校訂「梵文入楞伽経」二八四頁―二八五頁参照

(27) 影印北京版113巻281―4―2

山口博士「大乗非佛説に対する世親の論破――釈軌論第四章に対する一解題――」三八一頁参照

(28) 同書三八二頁参照

影印北京版113巻281―4―4

なお解深密経無自性相品第五には

「一切諸法皆無性　無生無滅本来寂
諸法自性恒湛槃　誰有智言無『密意』」

とある。（大正一六，六九六中）

(29) 鈴木大拙博士「楞伽経」（鈴木大拙全集第五巻）には，「偈頌品，これも後から追加せられたものである」（四七二頁）とある。

(30) 南条文雄博士校訂「梵文入楞伽経」一五六頁参照

宮井博士「入楞伽経「無常品」の原典研究」（大谷大学研究年報第二十集）八六頁参照

(31) 山口博士「世親の釈軌論について――かりそめな解題というほどのもの――」（日本佛教学会年報第二十五号）三五頁以下参照

(32) 安井博士「入楞伽経「無常品」の原典研究」六八頁参照

(33) Yat punaridamuktaṁ bhagavatā yadā tvālambyam-arthaṁ nopalabhate jñānaṁ tadā vijñaptimātra-vyavasthānaṁ bhavati vijñaptergrāhyābhāvādgrāhaka-syāpyagrahaṇaṁ bhavati(Sk p. 169. 1.4)

(34) Yadā tvālambanaṁ vijñānaṁ naivopalabhate tadā sthitam vijñānamātratve grahyābhāve tadagrahāt‖28‖ (Lévi p. 43. 1.10)

(35) 安井博士「入楞伽経「無常品」の原典研究」六八頁参照なお安井博士は「入楞伽経は……龍樹以後、無着・世親の時代にいたるごろまでに成立した中期大乗経典とされるのが通説である」（同書六七頁）と述べておられる。

(36) 宇井博士「佛教経典史」一四九参照

(37) 常盤博士「続支那佛教の研究」七七頁、一二五頁―一二六頁参照

(38) 佐々木・井ノ口・高崎・塚本博士「佛教史概説」（インド篇）九三頁参照
干潟博士「世親年代再考」三一六頁以下参照

(39) 拙稿「阿頼耶識思想の成立とその展開」――末那識の成立をめぐって――（大谷学報第四十九巻第二号）四五頁参照

(40) 拙稿「金倉博士古稀記念・印度学佛教学論集」の書評（佛教学セミナー第五号）六七頁参照

(41) 宇井博士「大乗荘厳経論研究」一六九頁参照
ādarśajñānamacalaṁ trayajñānaṁ tadāśritaṁ |
samatāpratyavekṣāyāṁ kṛtyānuṣṭhāna eva ca ‖ 67 ‖
(S. Lévi : Mahāyāna-sūtrālaṃkāra p. 46. 1.16)

(42) 影印北京版108巻70―5―1
me loṅ ye ṣes mi gyo ste ‖
ye ṣes gsum ni de la brten ‖

mñam ba ñid daṅ so sor rtog |
bya ba sgrubs pa kho na ḥo ‖